

「七高僧②天親菩薩について」

今日は七高僧のお二人目、天親菩薩のお話です。

天親菩薩はインド名を旧訳くやくでヴァスバンドウ（Vasubandhu・ぼそばんず婆藪槃豆）といい、『西遊記』さいゆうきで有名なげんじょうさんぞう玄奘三蔵の新訳では「せしん世親」といいます。

生まれは北西インド・ガンダーラ地方のプルシャプラ、現在のパキスタンのペシャワールで、後にはカシュミール（現在のインド、パキスタン、中国の国境付近の山岳地帯）で活動されました。天親菩薩は紀元 400～480 年頃の 5 世紀に活躍されました。七高僧の一番目である竜樹菩薩から二百年ほど後です。80 歳の時にアヨーディヤー国（中インドの北東）で亡くなりました。

三人兄弟の二番目で、兄はむ ちやく無着（アサンガ）、下の弟は比隣持跋娑（ヴィリンチヴァッサ）といい、三人とも仏教学者として知られました。

奈良の興福寺北円堂に、国宝に指定されている無着・世親菩薩立像があります。これは運慶の指導のもとに運慶の弟子が鎌倉時代に作成したと伝えられ、日本の肖像彫刻の最高傑作のひとつです。

天親菩薩は部派仏教の一派であるせついつさいう ぶ説一切有部で出家し、後にきょうりょうぶ經量部に転向しますが、学才がすぐれていたの部派仏教のすべての教えに詳しく、名声をあげたといえます。部派仏教とは、インドを中心に釈迦の死後百年から数百年の間に分裂・成立した 20 の部派のことです。これはアビダルマ仏教とも呼ばれ、上座部（小乗）仏教系に当たります。

そして著わされたのがあひだつまくしゃろん『阿毘達磨俱舍論』三十卷、略して『俱舍論』です。これは仏教の百科全書といわれ、仏教教理の基礎的典籍として重要視されています。

『俱舍論』は、日本では南都六宗のひとつ、俱舍宗（元興寺、東大寺など）の根本典籍となりました。

しかし天親菩薩は最初、大乘仏教については、「大乘はお釈迦様の説かれた教えではない」と批判的でした。

これを兄のアサンガ（無着菩薩）が心配します。

兄の無着菩薩も説一切有部で出家して、上座部仏教の空観を修行しますが満足できず、弥勒菩薩から大乘仏教の空観を学んで修得し、以来、大乘仏教の教義をすべて理解して、『しょう撰大乘論』

『ゆ が し じ瑜伽師地論』を始め、多くの書物を著わしました。

無着菩薩は弟にたびたび手紙を出して、自分中心の考え方を捨てて大乘仏教を学ぶように忠告しますが、返事はありません。

ついに「兄が重病だから、すぐ来るように」という使いを出しました。

驚いた弟は早速見舞いに駆けつけましたが、兄は病気がらしくありません。

不思議に思っていると兄は「私は今、心の病気にかかっている。それはお前がお釈迦様のみ教えを誤って解釈し、大乘の正しい教えを攻撃しているからで、毎日心配のあまり寿命が縮まりそうだ」というのです。

さすがに天親菩薩も深く反省して、兄から大乘の教えを受けるようになりました。

聡明な弟はすぐに大乘の教えがすぐれていることを悟り、このような立派な教えを批難してきた罪を深く感じて、その償いに舌を噛み切ろうとします。

兄の無着菩薩に「お前がその舌を切ったからといって、罪は消えるものではない。おまえはその間違っていた舌を正しく使うのだ」と諭された弟の天親菩薩は大乘仏教に転向しました。そして大乘に関する著作を数多く残します。

やがて、「**瑜伽行唯識学派**」の基礎を築いたといわれています。

「唯識三年俱舎八年」という言葉があります。「桃栗三年柿八年」のもじりです。

俱舎学を八年学んで唯識学を三年学ぶということで、仏教の基礎学問の重要性を表しています。そしてこれは、仏教教義の理解が難しいことをたとえている言葉です。

「俱舎学」は天親菩薩の『俱舎論』を中心とした部派仏教の基礎的学問で、「唯識学」は天親菩薩の『唯識三十頌』を中心とした大乘仏教の唯識思想の学問です。

「唯識」とは、『広辞苑』によれば、「仏教学説の一つ。一切の存在はただ自己の識（心）の作り出した仮のもので、識のほかには事実的存在はないと説く」とあります。

一切の存在はただ識のみであって、それ以外のものはない。それ以外のものは自己の識が作り出した仮のものである、というのです。

たとえば、ある人が暗い夜道を歩いていて、細長いものが道に横たわっていたとします。人間の識すなわち心は、驚いてそれを「わっ、蛇だ！」と判断してしまいます。しかし注意してよく見ると、それはただの縄にすぎません。この場合の「蛇」は、人間の心が勝手に作り出した仮の存在なのです。さらにもっと詳しくその縄を観察すると、ただの麻が編まれたもので、その麻もいろいろな縁起によって成り立っているのです。縄も麻も固定的な実体として執着できるものではなく「空」であって、縁起によって仮に縄だ、麻だと分別して言っているのにすぎないのです。思い込みによって事実とは全く違う認識をしていた、ということは誰でもあると思います。

この唯識思想は仏教の深層心理学ともいわれ、現代でも通用するものです。

ユング心理学よりも古い時代の深層心理学です。

『俱舎論』も『唯識三十頌』も天親菩薩の著書ですが、天親菩薩は部派仏教五百部、大乘仏教五百部、合わせて「千部の論主」と言われるほど、多くの著書を残されました。

そのたくさんの著書の中から親鸞聖人が選ばれたのが、天親菩薩晩年の作と伝えられる『浄土論』でした。

『浄土論』は正式名を『無量寿経優婆提舍願生偈』^{うばだいしゃがんしょうげ}といい、北魏の菩提流支^{ぼだいるし}の訳です。

初七日の法要の際には、この『願生偈』をお称えすることがよくあります。ここで言う「無量寿経」は、無量寿仏である阿弥陀仏のことを説いた経典という意味で『仏説無量寿経』のことですが、広く浄土三部経のことを指すという説もあります。

「優婆提舍^{うばだいしゃ}」はサンスクリット語「ウパデーシャ」の音写で、「論議」という意味です。

「願生」は安楽浄土に生まれたいと願うことです。「偈」は讃歌の意味です。ですからこの書名は、三部経に説いてある無量寿仏すなわち阿弥陀仏について議論し、西方浄土に生まれたいと願う偈で、天親菩薩がみずからの信仰を告白されたものです。

本文は、24行96句の偈頌^{げじゆ}（願生偈・詩句）と3000字たらずの長行^{じょうごう}（偈頌の解説・散文）から成っています。

偈頌は「世尊よ、私は一心に阿弥陀仏を信じて、安楽国に生まれることを願う」という言葉から始まり、浄土のうるわしさを讃嘆し、他力回向の信心である「一心」を明らかにされた讃歌です。

長行^{じょうごう}は、前の偈頌を解釈した文で、浄土に往生する行としての「五念門」と、その功德である「五果門」（五功德門）が説かれます。

この後で紹介する『正信偈』の天親菩薩に関する十二句の偈文は、どれもこの『浄土論』の文に依ったものです。

『正信偈』3頁目下段5行目～

天親菩薩造論説 帰命無礙光如来 依修多羅顯真実 光闡横超大誓願^{てんじんぼさぞうろんせ きみょうむげこうによらい えしゆたらけんしんじ こうせんおうちようだいせいがん}

天親菩薩『論』をつくりて説かく、「無礙光如来に帰命したてまつる」と。修多羅によりて真実^{てんじんぼさつ ろん と むげこうによらい きみょう しゆたら しんじつ}

をあらわし、横超の大誓願を光闡し、)

天親菩薩は『浄土論』を著して、「無礙光（阿弥陀）如来に帰依したてまつる」と述べられま^{てんじんぼさつ じょうどろん あらわ むげこう あみだ によらい きえ の}

した。浄土の経典（修多羅）にもとづいて阿弥陀仏のまことをあらわされ、すみやかに仏になる^{じょうど きょうてん しゆたら あみだぶつ ぶつ}

法すなわち他力（横超）のすぐれた誓願（第十八願）を広くお示しになり、)

「依修多羅顯真実」は、『浄土論』の「我依修多羅 真実功德相」（我、修多羅の真実功德相に依りて）という言葉に依ったものです。

「修多羅」はサンスクリット語で「スートラ」といい、「お経」のことです。修多羅はもともと

「糸」とか「紐」という意味ですが、それが教訓、教理、金言という意味で使われるようになり、

バラモン教では教えの内容を短い文句で簡潔にまとめたものをスートラと呼びました。英語でも「sutra」と言います。これが仏教では、ブッダが説いた教義を記した書のことをいいます。中国では、スートラは「経」と訳します。経とは「たて糸」であり、動かないもの、不変の真理を意味します。

また七条袈裟の後ろについている紐を編んだものも、「修多羅」と呼ばれます。

ここに出てくる「修多羅」は、『無量寿経』のことです。

「真実」は、親鸞聖人は「名号」（南無阿弥陀仏）であると示されました。

「光闡」は、広く明らかに説き述べることです。

「横超」の「横」は、よこさまにひと飛びに超えるということで他力を意味し、「超」は他力によって迷いを越えてさとりを開くことです。

「大誓願」はすべての衆生を救うと誓われた本願・第十八願のことです。ですから「横超の大誓願」とは「他力の本願」ということです。

資料にも書きましたが、『浄土論』の冒頭の四句は、

「世尊我一心 帰命尽十方 無礙光如来 願生安楽国」という言葉です。

〈世尊、われ一心に尽十方無礙光如来に帰命したてまつりて、安楽国に生ぜんと願ず〉

《世尊よ、私は心を一つにして、阿弥陀仏に帰命して、極楽浄土に生まれたいと願っています》

これは、おつとめの最後に唱える回向文にもなっています。

「世尊我一心」の「世尊」とは、釈尊、お釈迦様のことです。お釈迦様は『無量寿経』を説かれて、阿弥陀仏の本願を説かれているのです。

また「帰命尽十方無礙光如来」という言葉は、お仏壇内部の右側によく掛けてある掛軸の十字名号にもなっています。ちなみに六字名号は「南無阿弥陀仏」、九字名号は「南無不可思議光如来」です。

『正信偈』 3 頁目下段 9 行目～

「こう ゆ ほんがんにきえこう い ど ぐんじょうしやういっしん きにゆうくどくだいほうかい ひつぎやくにゆうだいえしゆしゆ 広由本願力廻向 為度群生彰一心 帰入功德大宝海 必獲入大会衆数」

〈ひろく本願力の廻向によりて、群生を度せんがために一心をあらわす。「功德の大宝海に帰入

すれば、かならず大会衆の数に入ることを獲る」〉

《こうだい ほんがんにき えこう ぐんじょう すく いっしん たりき しんじん 広大な本願力の回向によって、すべてのもの（群生）を救うために一心すなわち他力の信心の

徳を明らかにされました。「とお おお くどく ほうかい みょうごう きにゆう かなら じょうど おうじょう 大いなる功德の宝海（名号）に帰入（信）すれば、必ず浄土に往生

する身と定まります。』》

親鸞聖人が多くの高僧がたの中から七高僧を選ばれた条件の一つは、「教えについて独自の特色ある説明を加えられた方」ということでした。

天親菩薩の場合は、「一心」という独自の説明をされたことです。

「一心」というのは、釈尊の仰せに対して二心なく疑いがないということであり、すなわちこれは真実の信心のことです。ですから「一心」とは、「まことの信心」ということです。

親鸞聖人はこの「天親菩薩の一心」について、『教行信証』でも何度も取り上げられています。

聖人は、天親菩薩が「一心」という言葉で真実の信心を表わされた功績を讃嘆されて、祖師として仰がれたのです。

「功德大宝海」ですが、「功德」というのは名号のことであり、「大宝海」とは、あらゆる功德が欠けることなく満ちていることを、海にたとえられたのです。

「大会衆数」は『浄土論』の「五果門」(五功德門)の「入第二門」に出てきます。

『浄土論』の偈頌の解説である長行では、最後の方で「五念門」という浄土に往生する行と、その功德である「五果門」(五功德門)が説かれています。

「五念門」とは、阿弥陀如来の浄土に往生するための五種類の行のことです。

- ① 礼拝門らいはいもん＝身に阿弥陀仏を礼拝すること
- ② 讃嘆門さんたんもん＝光明と名号のいわれを信じ、口に仏の名を称えて阿弥陀仏の功德を讃えること
- ③ 作願門さがんもん＝一心もつぱに専ら阿弥陀仏の浄土に往生したいと願うこと
- ④ 観察門かんざつもん＝阿弥陀仏・菩薩の姿、浄土の莊嚴相を思い浮かべること
- ⑤ 回向門えこうもん＝自己の功德をすべての衆生にふりむけて、ともに浄土に往生したいと願うこと

この五念門の結果として得られる徳を、五種類の功德すなわち五果門・五功德門として示されています。

- ① 近門こんもん＝入第一門＝浄土に生まれるために阿弥陀仏を礼拝することによって安楽世界＝極楽浄土に生まれることができる
- ② 大会衆門だいえしゆもん＝入第二門＝阿弥陀仏を讃嘆して、名号のいわれを信じて如来のみ名を称え、如来の智慧の相である光明のいわれにしたがって修行することにより、大会衆すなわち阿弥陀如来の説法の会座えざにつらなる大衆の数に入る
- ③ 宅門たくもん＝入第三門＝一心にかの浄土に生まれようと願って、散乱の心をとどめ寂靜じやくじょう三昧の行を修める

ことによって、蓮華蔵世界に入ることができる

④ 屋門＝入第四門＝専らかの浄土の不思議な莊嚴を念じて觀察の行を修めることにより、浄土に往生していろいろな法味樂を受け楽しむことができる(①～④→入＝自利)

⑤ 園林遊戯地門＝出第五門＝利他の徳を成就する。大慈悲の心をもって、苦しみ悩むすべての衆生を見て、救うためにさまざまな姿を現し、煩惱に満ちた迷いの世界(生死の園、煩惱の林)に還ってきて、神通力をもって思いのままに衆生を教え導く位に至ること。このような働きは、阿弥陀仏の本願力の回向による。利他の徳を成就する。(⑤→出＝利他)

『正信偈』 4 頁目上段 1 行目～

「得至蓮華蔵世界 即証真如法性身 遊煩惱林現神通 入生死園示応化」

「蓮華蔵世界に至ることを得れば、すなわち真如法性の身を証せしむ。煩惱の林に遊びて

神通を現じ、生死の園に入りて応化を示す」といえり。)

《「阿弥陀仏の浄土(蓮華蔵世界)に往生すれば、ただちに(すなわち)真如をさとした身とな

り、さらに煩惱の盛んな迷いの世界(煩惱林、生死園)に還り神通力をあらわして、自在に衆生を救う(応化)ことができる」と述べられました。》

「得至蓮華蔵世界」という言葉ですが、五果門のうちの入・第三門である宅門に、蓮華蔵世界が出てきます。

蓮華蔵世界は、もとは『華嚴経』というお経に説かれている浄土のことです。「華嚴の滝」という滝が日光にはありますが、これはこの『華嚴経』から名づけられています。東大寺大仏の台座の蓮弁に描かれている世界が蓮華蔵世界です。しかしここでは、『阿弥陀経』に説かれる阿弥陀仏の極楽浄土のことです。

「真如法性身」は、阿弥陀仏と同じ覚りを開いて仏にならせていただくという意味です。

「遊煩惱林現神通」は、五果門(五功德門)の出・第五門である園林遊戯地門によっています。「煩惱の林」も「生死の園」も、どちらも同じく迷いの世界を意味します。私たちの住む迷いの現実のことを表わされた言葉です。

「遊」は「遊戯」の意味で、衆生を救うことが自由自在にできるという意味と、救っても救ってやったと執着しないことを意味するそうです。

「神通」は人間を超えた不思議なはたらきで、神通力といえます。

「応化」は救うべき相手に応じてさまざまな姿を変えて現れることです。

浄土に往生し、さとりを開いて仏となった上には、迷いの世界に還ってきて、他の衆生を救う活動をさせていただくことなのです。これを往相廻向・還相廻向といいます。

そしてこのような働きは、阿弥陀仏の本願力の回向にほかなりません。

これが、他力の信心である「一心」の利益です。

今回の正信寺からのお盆の案内葉書に、次のような親鸞聖人の和讃が書いてあったと思います。

**「安楽浄土にいたるひと 五濁悪世にかえりては
釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきわもなし」**

これは「往相廻向・還相廻向」、すなわち天親菩薩の五念門・五果門（五功德門）を詠んだ、『浄土和讃』の句なのです。

最後に要点を三つにまとめますと、

- ① 信心を得た人は、この世で菩薩の仲間入りができる（帰入功德大宝海 必獲入大会衆数）
- ② 浄土に生まれると、ただちに仏になれる（得至蓮華蔵世界 即証真如法性身）
- ③ この世に還ってきて、人々を救う（遊煩惱林現神通 入生死園示応化）

この三つの利益は、天親菩薩が示された「一心」すなわち他力の信心の徳によることを親鸞聖人は讃嘆されて、正信偈に詠まれたのです。

以上で今日のお話を終わらせていただきます。